KAN 環

夕月夜
第 48 号

千曲川地域の人と文化を紡ぐ

NPO法人上田図書館倶楽部（上田情報ライブラリー委託事業）
2022 年 10 月

夕月夜

なんとなく君に待たるるここちして
出でし花野の夕月夜かな

与謝野晶子

表紙の写真
古代東山道沿いに位置する立科町の津金寺。「かんのんばし」を渡ると正面に観音堂が建つ。天台宗の最も古い談義所として、学僧の養成が盛んに行われた場所である。敷地内には、北信濃に栄えた豪族滋野氏が鎌倉時代前期に建立した宝塔がある。

写真・文　矢幡正夫

もくじ

4　躍働
食を通して世界交流を楽しむ　大久保邦博さん……伊藤文子

9　信濃を旅した文人たち
高浜虚子と小諸時代……海野郁

14　ぶらり散策
安良居神社……望月聡子

16　寄稿
上田市立信濃国分寺資料館と私……井戸芳之

21　**上田自由大学１００周年　「私からみた上田自由大学」（第四回）**
……ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部　理事長　小平千文

26　あとがき

躍働

食を通して世界交流を楽しむ

大久保邦博さん

手作りの世界地図の前で

30代から50代にかけて世界70か国近くを巡り、現在は長野市権堂町で「世界食堂」を営む。長野市出身の大久保邦博さん（60歳）は県庁に勤めていた48歳のとき、「悔いのない生き方をしたい」と退職。「これから何をするか」を探しに世界放浪の旅に出た。もともと海外旅行が趣味。初めはポーランドやハンガリー、ロシアなど観光名所に足を運んだが、次第に物足りなくなり、「暮らすように旅をする」ようになる。インドでヨガを習ったりインドカレーと日本のカレーのレシピを教え合ったりした。また、アイルランドのパブで地元の人と一緒にお酒を飲み、ネパールの民家で料理をするなど地域の暮らしに触れる旅に変えていった。

それぞれの国の伝統料理や家庭料理を味わううち、暮らしの基本は「食」にあると思い至る。日本で各国の家庭料理を提供しながら文化交流をしよう。「これから」の輪郭が固まり、9年前、世界食堂をオープンした。現在は人脈が拡がり、知り合いの外国人に手伝ってもらいながら10か国

ほどの家庭料理を提供。「居ながらにして世界交流を楽しめる」と思い描いた通りの生活を送っている。

大久保さんとは、環41号の躍動に登場していただいた同じく元県庁職員の菅谷行博さんの紹介で知り合った。

インドでカレーを習得

Q　県庁を退職されるとき、ためらいはなかったですか。

A　高校生のとき観た映画「ロッキー」（無名のボクサーが世界チャンピオンと対戦する物語）の舞台になった、アメリカ東海岸のフィラデルフィアへ行ってみたいとずっと思っていました。ようやく行けたのが46歳のとき、28年間も憧れていた地に立てたときは感無量でした。「もっと早く来たかった」と強く思い、そのとき決めたのです。「本当に好きなことをして生きていこう」と。独り身だからできたことかもしれませんが、決めてからは迷いはありませんでした。

Q　世界を巡られて特に印象に残った国は？

A　そうですね、思い出深い国はたくさんありますが、地元に溶け込んで地元ならではの体験ができた国は印象的です。

ニュージーランドでバンジージャンプ、イスラエルでスキー、ロシアのサンクトペテルブルクでボリショイサーカス鑑賞など。また、住んでみたくなった国がアイルランドで

イスラエルでスキー

す。小さな街が点在し、それぞれに教会がある。とてもアットホームな国で居心地のいい国でした。「ひとりでパブに入ってふたりで出てくる」という言い伝えがあり、「パブにひとりで入っても中で誰かと友だちになる」という意味です。

Q　世界中を旅して、考えや生活など変わったことはありますか。

A　東北大震災直後にイギリスを訪れたとき、同宿のドイツ人から「日本には原発は何基あるの？」と聞かれて答えられませんでした。もっと日本という国について勉強しなくては、と反省しきり。海外に出たからこそ見えてくる国内の世界がある。さまざまな視点から物事を見ることの重要性を学びました。

　生活に関しては、「必要最小限の信頼できる道具だけを所有する」という旅のスタイルを、日常の暮らしにも取り込むことを心掛けるようになりました。いわゆる「断捨離」でしょうか。

Q　世界食堂についてお聞かせください。もともと料理が好きでしたか。

A　特に好きとか得意ということはなかったです。ただモノを作るのは好きでした。親父が大工だったのでその血を受け継いでいるのかもしれません。

　開店当初は、私の料理法を来客が見かねて、厨房で手ほどきしてくれたこともあります。今はロシア人やベトナム人などの知り合いが交替で家庭料理を作ってくれます。10席しかない小さな店ですので、来客同士が話しかけやすい雰

ネパールをバイクで移動

ネパールの竈で料理

囲気のおかげかもしれません。おかげで自分のレパートリーも増えました。

ここ権堂に店を持ったのは真向いに100年以上の歴史を持つ映画館「松竹相生座」があるからです。映画が好きでよく通ったので、権堂は愛着のある場所です。上映中の映画に合わせてメニューを決めることもあり、そのようなときは鑑賞後の人が立ち寄ってくれます。

月1回ワイン会も開いています。常連客の中にワイン好きがいて、彼が企画やワイン調達などをやってくれます。私はワインに合う料理を提供するだけなのですが、毎回満席になり盛り上がります。先日50回目を迎えました。

世界食堂の入り口で

「こういうふうにしたい、こういう方向へ進みたい」と願い続けると道は開けるもんだなあ、9年間を振り返ってそんな感じがしています。

Q　すらっとした体型でスポーツマンに見えます。

A　長野県は名峰が多いので若いときから登山をしました。槍ヶ岳から雲ノ平、穂高連峰など北アルプスはほとんど登りました。スキーも好きで白馬はホームゲレンデです。スイス、カナダ、オーストラリアなどでもスキーをしましたが、岩がゴロゴロむき出しのゲレンデもあって、白馬ゲレンデの素晴らしさを再認識しました。

10年ほど前から整体バランス運動というのをやっています。骨格をきちんと使ってゆがみを正す運動

本日のお勧めメニュー

で、血管や筋肉、リンパといった身体全体の代謝を高める効果があります。

Q　これから何をやりたいですか。

A　この世界食堂に関連して民宿「世界食堂」を大町市美麻に再来年オープンの予定で準備を進めています。外国の宿泊先で居合わせたさまざまな国の宿泊者と一緒に料理をしながら、国自慢や旅の失敗談などを語り合ったのがとても楽しかったのです。さまざまな国の生活体験もかけがえのないものでしたので今度は自分がもてなしたい。農業体験や日本の文化、里山ハイキングなど日本をじっくり味わってもらいたい。

美麻から鹿島槍ヶ岳が望めるのですが、里山とのコントラストが本当に美しくて世界に誇れる風景です。そんな環境も楽しんでほしいと思っています。

●●●●●●●●●●●●

旅の集大成として旅人を迎えることを生業にしたいと決めた大久保さんだが、「60歳になって新しい事業に挑戦しなくてもいいのでは?」と弱気虫がときどき顔を出す。そんなときは県庁を退職した時の初心にかえる。「やらないで後悔するよりやって後悔する方がいい」。民宿予定地からの絶景を眺めながら、大久保さんは気持ちを新たにする。

令和4年7月29日訪問

伊藤文子

インドでヨガ

フランス　コートダジュールをドライブ

高浜虚子と小諸時代

虚子が繰り返し歩いた虚子庵の縁側

白牡丹といふといへども紅ほのか
虹立ちて雨逃げて行く広野かな
蛍火の今宵の闇の美しき
桐一葉日当たりながら落ちにけり
遠山に日の当たりたる枯野かな
子規逝くや 十七日の月明に

近代俳句の巨星・高濱虚子（1874―1959）は、生涯にわたりおびただしい数の句を詠んでいます。活字として確認できるのは約2万2千句と言われていますが、代表作の中からいくつか選んでみました。「平明にして余韻のある句」を唱道した虚子らしい、心に染み入る作風です。みなさんもご存知の句があるのではないでしょうか。

虚子は愛媛県松山市に生まれ、中学時代より郷土の先輩正岡子規に兄事。虚子の名は本名の清（きよし）から子規が命名しました。子規没後はその俳句の精神を引き継ぎ、俳誌「ホトトギス」の理念となる「客観写生」や「花鳥諷詠」を提唱したことでも知られています。その文学活動は俳句にとどまらず、写生文、小説と多岐にわたりました。

鎌倉に住んでいた虚子夫妻が、小諸市与良に疎開したのは昭和19年9月4日のこと。虚子70歳でした。小諸での暮らしは昭和22年10月25日まで足かけ4年にわたり、その日々は地元の小

（①～⑤の地点に句碑があります）

虚子の散歩道

R18

至上田方面

至軽井沢方面

笠石の句碑 ④

馬頭観音

八幡神社 ⑤

野岸
小学校

③ 大日堂

虚子庵 ②

小山家

① 高濱虚子記念館

至小諸駅

北国街道与良町

山栄一氏に全面的に支えられました。この間、虚子は『小諸百句』や『小諸雑記』をまとめ、小説『虹』を執筆。「小諸時代」という新たな世界を生み出しました。

小諸からは浅間山や八ヶ岳に蓼科山、さらには遠く北アルプスが眺望できます。虚子は、小諸の厳しくも美しい風土に親近感を抱いていきました。『小諸雑記』の中の章「縁側散歩」や「一日」には、虚子なりに工夫を凝らして長い冬を過ごす様子が記されています。

炬燵にくすぶってばかりも居られないので、私は三間半の縁側を行ったり来たりして一時間ばかり費やすことがよくある。其処は硝子障子を通して日がよく射し込むので天気がいゝ日は、かなり暖かいのである。（「縁側散歩」）

この散歩は今日一日の仕事に携る最初の勇気を得ることにもなるのである。三間半の廊下を何十遍何百遍となく往復することによって體の内が自然に暖まってきて、今迄かがんで居った背中もしゃんと伸び、はく白い息にも勇気がこもって居るような気がして来るのである。（「一日」）

二間だけの家に、虚子夫妻は二人のお手伝いと住んでいました。夕食後のひととき、四人は切炬燵があるひと間に身を寄せ合っていましたが、ある時、虚子は本の朗読を思いつきます。「本を讀んで聞かす」の章からは、『忠臣蔵』やパールバックの『大地』などを読む、冬の夜のほのぼのとした情景が浮かび上がってきます。

小諸の冬は長く、寒さが少し弛んできたかと思うと、またどかっと寒さが戻ってくる。そんな風で春は中々やってこない。「小諸にも春がきた」の章には、待ちわびる虚

高濱虚子記念館

柴を負ひそれに
しめじの篭をさげ
（虚子記念館入口）

人々に更に
紫苑に名残あり
（虚子庵玄関前）

風花に
山家住ひも早三年
（小山肇邸前）

秋晴の
淺間仰ぎて主客あり
（笠石の句碑）

立科に春の雲
今うごき居り
（八幡神社境内）

子の心持が手に取るように表現されています。春の訪れと共に、虚子は浅間山に向かう田園の小径をよく歩きました。すると、里人がすれ違いざまに声をかけてきます。はじめのうちは戸惑っていた虚子ですが、次第に馴染みも増えて、小諸は親しみのある町になっていました。

滞在中、虚子はたびたび句会を開いています。『小諸雑記』の中の「病気」の章には、「桃花会」という句会が誕生したいきさつが述べられています。

虚子の家の近くに疎開していた孫が病気に罹った時のことです。家主の小山家の紹介で来てくれたのが、栗谷川という医師でした。病状はかなり重いものでしたが、医師は何度となく往診を重ね、やがて孫は快方に向かいました。虚子は何か栗谷川氏の厚意に報うることはないかと考え、俳句を作ることをすすめてみました。以来、虚子の指導の下、栗谷川氏を中心に開かれた句会が桃花会です。句会は、虚子が小諸を去る昭和22年10

月まで25回続きました。また、「小諸ホトトギス会」や懐古園での「虚子観月句会」など、さまざまな句会を開催。昭和21年には、古い蚕室を改造した通称俳小屋が造られています。

戦時下にありながら、こうして充実した日々を送った虚子は、同時に小諸の地に豊かな文化をもたらして、惜しまれながら鎌倉に帰っていきました。

現在、与良地区には高濱虚子記念館が建ち、虚子が歩いた道は「虚子の散歩道」として整備されています。田園風景の残る中を、マップ片手に5基ある句碑を巡ってみました。途中、急な坂道がありますが、ゆっくり歩いても30分くらいでしょうか。句碑は、それぞれ個性的な姿を見せています。

虚子が過ごした旧宅は、当時の姿のまま「虚子庵」として保存されています。初めて虚子がこの家を訪れた日、紫苑の花が出迎えてくれました。「人々に更に紫苑に名残あり」の句は、小諸を去るにあたって詠んだもの。秋になると、今でも庭先には2メートルもあろうかという名残の紫苑が咲きます。

「環」では、これまで島崎藤村や若山牧水、画家の小山敬三や白鳥映雪など、小諸ゆかりの人物を取り上げてきました。今回、虚子の足跡を辿りながら、多くの文人に愛された小諸の街は、文化的にも恵まれた地であることにあらためて思い至りました。なお、小諸懐古園内にも虚子の句碑「紅梅や旅人我になつかしき」が立っています。

海野　郁

参考文献・Web サイト
『虚子の小諸』宮坂静生著　花神社 1995
『佐久の俳句史』矢羽勝幸著　㈱櫟 1989
『昭和文学全集 43』角川書店 1954
小諸高濱虚子記念館
https://www.city.komoro.lg.jp/soshikikarasagasu/kyoikuiinkaijimukyoku/bunkazai_shogaigakushuka/4/2/5/1537.html

ぶらり散策

安良居神社

丸子公園の一角に、上丸子地域の氏神が祀られている安良居神社があります。彫刻などが有名で、以前から訪れてみたい神社でした。鳥居をくぐると正面に拝殿があり、その奥に上田市有形文化財に指定されている本殿が建っています。創建は不詳ですが、木曽義仲にまつわる伝承が残されていることから、その時代の前から祀られていたものと思われます。

江戸時代末期、本殿と拝殿は有名な諏訪の宮大工・立川和四郎富昌によって改築されました。本殿の脇障子の板に彫られた、手長と足長のユーモラスな彫刻は全国的にも珍しいもの。海老虹梁の昇龍や、向拝側面の竹に亀・松に鶴など、立川流の特色ある浮彫刻が美しく飾られた本殿は必見です！　普段は覆屋に守られていて見ることができませんが、特別開放期間には予約すると参拝できるので要チェックです。拝殿に向かって左側奥の切り株の上に、小さなお社

境内への石段

切り株に祀られるお社

があります。詳細は不明ですが、立ち寄ったら是非こちらも見てください。

魚道

参拝を終えて駐車場に向かって下りていくと、すぐ傍を千曲川の支流である依田川が流れ、なんとも心地よい風が吹いていました。４～５月、この場所にはたくさんの鯉のぼりが泳ぐことで知られています。川を眺めていると、川底の石段をリズミカルに流れる水の動きに目が留まります。魚道（ぎょどう）といって魚専用の通路です。川を上り下りする習性をもつ魚の通行を助けるためにつくられたもの。また、魚だけでなく台風などで下流に流されてしまった生き物が元の住処にもどるためのものでもあります。人にも生き物にもやさしい工夫が施されています。

９月１日訪問　望月聡子

-----web サイト -----

・上田市の文化財　https://museum.umic.jp/bunkazai/

・安良居神社　上田市ホームページ
https://www.city.ueda.nagano.jp/site/kisoyosinaka-maruko/57473.html

・魚道（学研キッズネット）
https://kids.gakken.co.jp/jiten/dictionary02200654/

上田市下之郷のカカシ

寄稿　第六回

上田市立信濃国分寺資料館と私

井戸芳之

上田市立信濃国分寺資料館外観

この寄稿でこれまで上田市立美術館、博物館、上田図書館、公文書館、観光会館のことを紹介しました。六回目の今回は上田市立信濃国分寺資料館です。

上田市立信濃国分寺資料館は、昭和五十五年に、信濃国分寺史跡公園内に開館しました。その建設にあたっては、山浦國嗣さんとおっしゃる市民の方からの、約一億円の寄付がありました。ロビーには、寄付の説明パネルと山浦さんの胸像が展示されています。

信濃国分寺資料館では、上田・小県地方の原始・古代や、全国の国分寺跡の関係資料の収集・保管・調査研究を行っています。収蔵資料点数は令和三年度末で、十四万三千五百点余りあります。

入口には銅鐸のレプリカが置いてあり、自由に叩いてその音を確かめることができます。銅鐸は弥生時代に農耕の祭祀に使われたと考えられていて、ここでは弥生時代の人々が聴いたのと同じ音色を聴けるというわけです。

第1展示室は、信濃国分寺跡出土資料を中心に、「狩猟の時代」「土器のはじまり」「稲作のはじまり」「くにのはじまり」などのコーナーに分け、原始から平安時代までの資料を常設展示しています。

平成十六年に、安楽寺八角三

重塔の模型の展示が加わりました。この模型は、宮大工棟梁の西島敏雄氏が制作し、現在安楽寺で所有しています。細部の構造まで実物に忠実に制作され、文化財としての価値を有した模型とされています。

第2展示室では企画展を、年に数回行っています。令和三年度の秋季企画展は「上田盆地の玉作り遺跡～社軍神遺跡」、令和四年度の春季企画展は「名勝岩鼻の里・半過の遺跡」でした。また毎年一月には「新春蘇民将来符展」を、恒例で開催しています。

市民向けの講座・体験教室も開催しています。上田地方の古代史・歴史等を学ぶ「市民講座」「資料館講座」、万葉集を学ぶ「万葉集講座」、親子を対象とした土器づくりなどの「親子歴史体験教室」などです。

令和二年度、三年度は、感染症対策のために多くの講座が中止になりましたが、四年度は三年ぶりに親子歴史体験教室を開催しました。募集開始後すぐに定員に達する人気ぶりでした。

この教室では、国分寺から出土した瓦の拓本を作りました。収蔵庫のバックヤード見学もあり、土器や瓦に直接触れるなど、子どもたちには貴重な体験となりました。

さて、ここからは信濃国分寺資料館と私の関りについて書きます。

私が上田に来て今の仕事に就き、収蔵品のデジタルアーカイブを最初に手掛けたのが、信濃国分寺資料館でした。その時に聞いたお話で印象に残っていることがあります。

遺跡の研究では「実際に手に持って、質感や重さを実感することも大事」とお聞きしました。例えば出土した瓦を持って「こんなに重いのか」と感じることです。

遺跡では、残っている柱の穴の大きさや間隔などから、支えることができる重さを推計し、その上の建物を推測するそうです。

その時に、瓦の重さの実感があれば、よりリアルに建物を考えられるし、間違えてあり得ない推測をすることも防げる、というわけです。

バックヤード見学で土器や瓦に触れるのはもちろん、入口で銅鐸の音が聴けることも「実感することが大事」という考えが共通しているように思います。

信濃国分寺資料館がある、信濃国分寺史跡公園にもよく訪れます。特に、初夏の藤の花と、晩秋の黄色に色付いたケヤキの並木を楽しみに来ることが多いです。

特にケヤキ並木では、娘たちが小さい頃に来たことが思い出されます。一面が黄色い絨毯のようになったところに、まだ赤ちゃんの次女と、それを後ろから抱きかかえるように支える長女が写った写真が残っています。

ここからは、信濃国分寺資料館とのお仕事を紹介します。

先に書いた収蔵品のデジタルアーカイブを含む、信濃国分寺資料館の公式サイトと、信濃国分寺の蘇民将来符をテーマにしたサイトの2つがあります。

信濃国分寺史跡公園けやき並木

ホームページ
「信濃国分寺資料館」
https://museum.umic.jp/kokubunji/

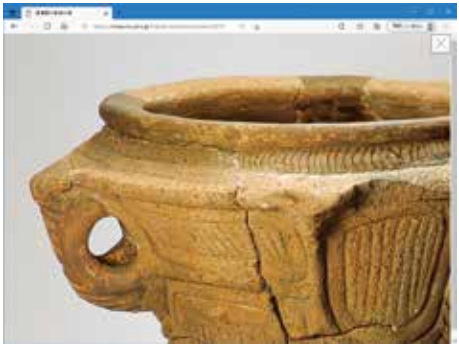
信濃国分寺資料館の公式サイトは、平成十一年に公開し、令和四年にリニューアルしました。

内容は、お知らせなどの「トップページ」、利用案内などの「資料館概要」、史跡公園を紹介した「史跡公園ガイド」、国分寺三重塔などの地域の文化財を紹介した「上田文化財情報」、収蔵品百六十点を高精細画像で紹介した「WEBギャラリー」と、第1展示室の展示をホームページ化した「上田地域の古代文化」の六つから成ります。

この公式サイトについて、興味深いことがありました。令和元年度までは年間二万件台だったアクセス数が、二年度に約十五万八千件、三年度は約二十二万件と、大きく増えたのです。調べてみると、増えたアクセス数のほとんどが「上田地域の古代文化」のページで「縄文時代　年表」などの言葉で検索

されてきていました。

アクセスが急増した令和二年度には、感染症対策を契機として、全国の小中学校への情報端末の導入と、オンライン学習が進められています。「上田地域の古代文化」のページが、学校の教材として広く活用されたのではないかと推測しています。



ホームページ
「信濃国分寺資料館」の画面
収蔵品の拡大表示

ホームページ
「蘇民将来符　その信仰と伝承」
https://museum.umic.jp/somin/

信濃国分寺の八日堂縁日で頒布される護符の蘇民将来符をテーマとしたホームページです。

蘇民将来符の製作工程や歴史、蘇民将来信仰の解説などと共に、関連の文化財である「牛頭天王祭文」「八日堂縁日図」の高精細画像と解説を掲載しています。平成十二年に、国の選択無形文化財に認定された時に制作した記録映像も見られます。

ホームページ
「蘇民将来符 その信仰と伝承」の画面

最後に、今回のテーマの「信濃国分寺資料館」に関連して本を一冊ご紹介したいと思います。（実は私は本を読むのと同じぐらい、誰かに本を薦めるのが好きです）

月の森に、カミよ眠れ／（上橋菜穂子著　偕成社）

舞台は九州南部、時代は恐らく奈良時代で、朝廷の力がこの遥か遠くの山奥にまで及ぶようになってきたころです。

狩猟採集と焼畑で食糧を得て、「カミ（神）」を敬い畏れる暮らしをする村に、「稲を育てれば、もっと豊かに暮らせる」という考えがもたらされます。しかし、稲を植える水田を作るには「人が触れてはならない」という掟がある沼地を拓かなくてはなりませんでした。

物語は、これまで守ってきた生活と、新しくもたらされた思想とのせめぎ合いを描きます。

この作品はファンタジーでもちろん架空の物語ですが、信濃国分寺資料館の調査研究対象である古代の日本の姿を垣間見ることができます。

著者の上橋菜穂子さんは、「守り人」シリーズなど多くのヒット作がある人気作家です。この本は平成三年発行のデビュー二作目ですが、既に「異なる文化や思想の衝突とその間で生きる人々」という、後の作品に通じるテーマが表現されています。

上橋菜穂子
「月の森に、カミよ眠れ」
偕成社

☆筆者ご挨拶

こんにちは。私は井戸芳之と申します。平成八年の暮れに東京都から上田市に引っ越してきました。それ以来二十五年あまり上田市マルチメディア情報センターに勤めています。趣味は美術鑑賞と読書です。

私はここに、上田市の公共施設のことを書いています。その理由は、私が常々「公共施設が私の暮らしを豊かにしてくれている」と実感していて、それを知っていただきたいからです。上田市に来る前に住んでいたのはどこも大都市で、その頃には公共施設にこんな想いを感じることはありませんでした。

上田自由大学100周年「私からみた上田自由大学」

（第四回）

NPO法人上田図書館倶楽部
理事長　小平千文

自由大学に学んだ聴講生たちのあゆみ

前回に続いて、上田自由大学に学んだ聴講生の宮下周と小宮山量平を取り上げます。伊那自由大学関係で佐々木忠綱と胡桃沢盛（くるみさわもり）について触れることを前号でお伝えしましたが、二人については詳細な文献が出版（注1）されていることからそれらに譲らせていただくことを最初にお詫びします。

最後に、生涯にわたって自学自習の自己教育（生涯学習）を追究しようとした自由大学という教育機関を創り出してくれたことに感謝しながら、これからの願いに触れ、この稿を閉じたいと思います。

「村の太陽」（注2）宮下周―自由主義思想から村民教化思想へ

戦前の宮下周（1895―1945）のあゆみは、一言でいえば改造から翼賛への歩みといえます。最初に上田自由大学の関係からみていきましょう。宮下が聴講した自由大学は、三回確認できます。最初の聴講は、一九二二年二月十四日開講の土田杏村「哲学概論」、そして翌二十三年二月五日から出隆「哲学史」、最後は一九二八年三月十四日開講のタカクラ・テル（注3）「日本文学研究」です。講義内容は、宮下とともに聴講した上田市中之条村中沢鎌太（かまた）『日記』によれば、「世界の人類を語学上より分類して日本文学に及ぶまでを述べたもの」でした。

この六年間は、宮下を取り巻く生活環境が大きく変化する時でした。県連合青年団が掲げた青年団の自主化方針のもとに、青年会はいち早く会員中から団長を選出する自主化した浦里青年会となり、その初代会長に二十七歳の宮下が選出されました。「自由主義思想旺盛にして青年団運動活発なり」

宮下　周
「1931年2月」
掲載紙不明

（前掲書）し時でした。

この宮下の考えを大きく変えていくことになった要因は、一九二九年一月、三十四歳にして村長になったときの昭和恐慌といえましょう。上田自由大学を開講した山越脩蔵らとともに男子普通選挙法実現と軍備縮小を主とした活動をしてきた信濃黎明会の会員であった宮下は、恐慌により村内製糸工場の営業不能や越戸（こしど）銀行・浦里倉庫会社が破綻するいっぽう、自由大学を聴講していた井沢譲らによる浦里農民組合の結成など、混乱する村政の立て直しをはかるため、県下最初の経済改善委員会を立ち上げ、経済更生運動推進の先頭に立つことになりました。村の再建を目指して、村民の結束を願う主張を『浦里村報』などを通して村民に呼びかけました。その主張は、「階級闘争ではなく、階級の調和だ、農村内部の協力による資本主義、個人主義からの防衛と改正だ。目先の小地主や、役場や、（産業）組合へのけんかではなく（中略）村のすみずみにまで協力一致、家庭の平和に、生活の更新に、一村の全体的発展につとめる事だ」（注4）、という協同精神の涵養、全村融合の村民教化思想でした。明らかに自由平等思想を基調とする大正デモクラシーからの決別でした。

昭和八年二月十五日 北信
共産黨の細胞組織を逆用
赤退治に總動員!!
上小思想對策委員會設立さる
具體案を作成して
文部司法縣當局に陳情
教員の任命に思想人格を調査せよ
信濃教育會
大改革を要望
縣下教育界に一石を投ず

上小思想対策委員会
『北信毎日新聞』1933.3.19

この村民教化思想は、一九三三

年二月四日に発生した労農運動や青年運動などあらゆる社会運動を壊滅に至らしめた「二・四事件」直後の同年三月二十二日、「赤化排撃」を目的に結成された上小思想対策委員会（注５）の実践的な思想の基調になるものでした。同会は、上田市長を旗頭に小県郡下の町村長、学務委員、警察、軍人会長らで組織されました。その構成と同様の形態の組織である「支会」を小県郡下の各市町村に設置し、さらにそのもとに「分会」の結成を試みようとしましたが、念願通りにはいきませんでした。しかし、活動は意見を申し立てる建議を文部・司法・陸軍各省や知事・県会・信濃教育会に送付するという戦術で行われました。一例を挙げれば、同年四月二十二日、滝川幸辰（ゆきとき）京都帝国大学教授の『刑法読本』が国体思想に反するとされ、鳩山一郎文部大臣が滝川の辞職を迫った事件が起きました。この時、全国に先駆けて「大学が赤の養成所である」「不名誉」は「根絶したい」。「滝川一人がどうなろうが大したことではない」との建議を文部大臣宛に送っています。

こうした組織や活動に対して、自由大学に学んだ人たちのなかから疑義をこめたような動きはみえてはきませんでした。

戦後上田自由大学の再建から理論社設立　小宮山量平

小宮山量平（１９１６―２０１２　上田市）が上田自由大学とかかわりを持ったのは、戦後の上田自由大学再建を図った常任世話人として高倉テルと山越脩蔵の長女さちの養子となった夫の山越完吾とともに動いた時でした。

再建の目的を謳った敗戦直後の十二月二十日に発表された「上田自由大学趣意書」は、敗戦は「日本人の国民としての民度が如何に低いかをはっきりと知り、愈々（いよいよ）自由大学の使命の重かつ大なる事を知りました」、「よって吾々はこゝに郷土の先輩の創設になる自由大学を復興し、科学的社会人教育の機関をつくる」と、宣しています。

発表された直後の二十七日から高倉テルの「文学論」が、鷹匠町公会堂で始まりました。講座は、

小宮山量平
エディターズミュージアム
小宮山量平の編集室所蔵

翌一九四六年十一月まで一年間にわたり九講座がもたれたもののそれを最後に三度花開くことはなく歴史の幕を落としています。なぜなのか。主宰者小宮山は、どのような立ち振る舞いをし、その後どのような歩みをしたのか。小宮山が残した言葉で綴っておきましょう。

『戦後精神の行くえ　聞き手鈴木正・渡辺雅男　小宮山量平を語る』（こぶし書房　１９９６年）で、「歴史に残るべきぼくの仕事は、『上田自由大学』を継承したということ。これはぼくの代になってから最も活発な時期になり、主宰期間が一番長く続いて、戦後消滅するまで、ぼくはその中心に位置していた」と語っています。

しかし、「戦後の『上田自由大学』についてはほとんどどこにも書かれてませんね」との鈴木の質問に、小宮山は「僕がしゃべらないから」と答えている。なぜ、小宮山はしゃべらなかったのだろう。それについて、次のように語っています。

「自由大学という無限に人々の中に広げてゆくべき運動」なのに「自由大学はすっかり左翼・共産党系に乗っ取られた運動になって、ぼくの主宰の下から外れていって、当然のこと、自滅してしまうわけです。そういういきさつをあられもなく語るということを、ぼくはあまり好まないものだから、これまで沈黙をまもっておいた」（注６）と。

自由大学のそもそもの理念は、土田杏村が「伊那自由大学とは何か」でも述べているように、「我々の大学の教育は、団体として特に資本主義的でもなければ社会主義的でも無く其等の批判を自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得るを目的とするものである」ことに置かれていました。その理念が打ち消されてしまった小宮山は、「自立的な精神が、どうしたら守り通せるか」「わが自律的精神を探り当てるつもりの根本的な『理論』こそが必要なのではないか。友人たちが私を編集長としての雑誌刊行を企てていた。よし、その誌名は『理論』、社名は『理論社』だ。私は文化クラブ（注７）の諸君の了解を得て」上京し、一九四七年五月「理論社」を創業、『季刊理論』を刊行することになったと、

『理論』創刊号
前掲編集室所蔵

語っています。その時の小宮山の思いは、「同胞よ　地は貧しい／われらは豊かなを種子を／蒔かなければならない（ノヴァーリス・ドイツの詩人）」と綴っています（小宮山量平『昭和時代落穂拾い〝回帰の時代〟によせて』１９９４年）。

稿を閉じるにあたり

一〇〇年前、ここ上田・小県の青年たちによって創り出された自己教育による上田自由大学は、途中で挫折してしまいました。しかし、自学自習、自己教育と表現こそ違ってもこの大学が求めた自立的精神を養うことを追い求めようとした理念は現在は生涯学習として引き継がれています。やがて来るデジタル新社会は、自由大学が求めた理念をさらに追究するために、いよいよ「豊かな種子を播く」ための「『深く考える力』と『想像力』」（注８）を培う自己教育を強く求められる、といえそうです。

（完）

（注１）大日方悦夫著『満洲分村移民を拒否した村長　佐々木忠綱の生き方と信念』信濃毎日新聞社　２０１８年、「胡桃沢盛日記」刊行会編　飯田市歴史研究所監修『胡桃沢盛日記』全６巻　２０１１―２０１３年

（注２）宮下周のドキュメンタリー的著書・沓掛十六著『太陽の子』竹村書房　１９４１年

（注３）高倉輝の本名は輝豊あらため輝、タカクラ・テルと再度の改名の相談に乗ったのは宮下周という（『上田市誌』「上田の風土と近代文学」２０００年）

（注４）『浦里村報』第１１５号　昭和８・３・１５

（注５）１９２８・５・７創刊された１９３０年代社会運動高揚期の情報を伝えた『社会運動通信』（１９３３・６・８）は、この組織を「長野のナチス」と評した。

（注６）詳しくは、長島伸一著『民衆の自己教育としての「自由大学」』梨の木舎　２０２２年、山野晴雄「戦後上田自由大学の再建と展開」（上條宏之監修長野県近代史研究会『長野県近現代論集』龍鳳書房　２０２０年）参照

（注７）正式名称は「ちくま文化クラブ」。小宮山が駅前料亭（若菜館）店頭で始めた貸本屋。

（注８）堤未果『デジタル・ファシズム　日本の資産と主権が消える』ＮＨＫ出版新書　２０２１年

あとがき

図書館へ行かなくても図書館の本を電子書籍として借り、自分のパソコンやタブレットで読むことができる、そんなサービスが始まりました。その名も「デジとしょ信州」。

https://shinshu-kyodo-library.overdrive.com/

「デジとしょ信州」は長野県と県内市町村による協働電子図書館で、利用申し込みは公共図書館でできます。

早速利用してみました。まずは小説。パソコンで開いてみると、縦書きの文章がパソコン画面に収まるように表示されました。小さい字を読みなれている方には大丈夫だと思うけど、私のような老眼にはちょっと文字サイズが小さい。そこで画面をダブルクリックして拡大表示してみました。するとページの上下が切れてしまい、画面を上下に動かさないと読めません。どうもパソコンで読むのは私には不便な感じです。

そこで「使い方マニュアル」を参考に「Libby」というアプリを iPad にインストールして試してみるとこれはバッチリ。字のサイズも適当で上下が切れることもなくて読みやすくなりました。マンガや雑誌も iPad のようなタブレットのほうが読みやすいと思います。

「デジとしょ信州」で電子書籍を読むためにはインターネット接続が必要ですし、まだ搭載されている資料点数は多くないけれど、本を読むための選択肢が増えるのはとてもいいなと思います。

（幸）

KAN
環　千曲川地域の人と文化を紡ぐ
第 48 号　夕月夜　2022 年 10 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部
https://ueda.zuku.jp/
電話 /FAX　0268-25-3115　　info@zuku.jp
（上田情報ライブラリー委託事業）

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます

環スタッフ：
伊藤文子　　海野 郁　　西入幸代
宮下明彦　　望月聡子　　矢幡正夫

ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部は、図書館との協働による学習活動や情報サービス活動、文化活動などを行っています。また図書館関連業務を上田市から受託して、市民参加による幅広い図書館サービスを行い、地域文化の発展に寄与することを目的としています。電子ジャーナル「環」も受託事業の一つとして上田図書館倶楽部が発行しており、千曲川地域の文化を通して人と人、人と地域をリングのように結び、文化とコミュニケーションの環を広げていくことを理念に掲げています。